

# 円滑な幼小接続に向けた保育プログラムの提案

## Proposal of the Childcare Program for Smooth Connecting from Kindergarten to Elementary School

高 橋 多美子

Tamiko TAKAHASHI

(和歌山大学教育学部人文社会系)

2017年7月26日受理

### Abstract

The state of who “they can’t get group behavior” “they can’t sit down during class” in a classroom in a 1st grader of elementary school happens from the second half in 1990’s, and a point that tuition doesn’t consist and so-called small 1 “problem” have formed. People exchanges of a child, a nurture person and a teacher and communication are being planned for in recent years, but improvement of a nursing detail in a kindergarten and a day care center isn’t put into effect so much. Curriculum development of a nursing detail “the environment” was performed and nurture practice was inspected so that it might lead to a smooth connection targeted for 5-year old by this research. Specifically, the thing which works on cultivation of radish by a parent and child and the activity through taking a walk naturally that I touch nature as well as observe nature using loupes, picture books and illustration books, etc. and check it were performed. A child could learn while enjoying oneself in independent way, and as a result, it became clear that utilization can be expected from now on as 1 of nurture programs for a smooth connecting from kindergarten to elementary school.

**キーワード：**円滑、幼小接続、保育内容、保育プログラム

### 1. 円滑な幼小接続の重要性

本研究は、幼稚園及び保育所における5歳児を対象として、小学校教育への円滑な接続に向けた保育内容「環境」における保育プログラムの開発を目指す。

1990年代後半から、小学校1年生の教室において、「授業中に座ってられない」「集団行動が取れない」等の状態が起り、授業が成り立たない問題、いわゆる「小1プロブレム」が生じ始めた<sup>1)</sup>。文部科学省においても、この問題を重要視し、「幼児期の教育と小学校教育の接続について」を提示し、幼稚園、保育所及び認定子ども園と小学校との連携を一層強化し、子どもの学びの連続性を確保することの重要性を述べている<sup>2)</sup>。

平成20年に改訂された幼稚園教育要領(2008)及び保育所保育指針(2008)においては、保育内容「環境」及び「表現」における内容の取り扱いに関して「他の子どもの考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」、「他の子どもの表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にすること」等が新たに加わり、他者との関わりの中での遊び・学び「協同的な遊び・学び」の重要性を提示している<sup>3)</sup>。また、小

学校学習指導要領解説生活編(2008)においても、「小1プロブレムなど、学校生活の適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ること」等を指摘している<sup>4)</sup>。

さらに、平成29年改訂の幼稚園教育要領(2017)及び保育所保育指針(2017)においては、「小学校教育との接続に当たっての留意事項」として、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図ることが新たに明記された<sup>5)</sup>。『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』10項目のうち、「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」等4項目が保育内容「環境」に関する内容である<sup>6)</sup>。このように保育内容「環境」は、円滑な幼小接続に向けて関連の深い領域である。

本研究は、円滑な幼小接続に向けて、子どもの探究心や知的好奇心を育む保育内容「環境」における保育プログラムを提案する。具体的には、まず、幼小接続の実態を調査すると共に、その背景や要因を考察する。次に、円滑な幼小接続に向けた小学校や幼稚園・保育所等における取り組みを概観する。最後に、今後の幼稚園・保育所における保育内容「環境」における新たな保育プログラムを提案する。

## 2. 小1プロブレムの実態と要因

### (1)小1プロブレムの実態

東京芸術大学(2007)は、全国の市区町村教育委員会を対象に小1プロブレムに関するアンケート調査<sup>7)</sup>を行った。小1プロブレムの発生に関しては、「現在発生を確認している」20.2%、「以前はあったが今はない」21.0%、「以前からない」50.3%、「未回答」8.6%という結果になり、約4割の市区町村において、小1プロブレムが発生したことになる。また、小1プロブレムの発生を確認している教育委員会を対象に、発生した学校数を調査した結果、0校が2件、1校が85件、2校が47件、3校が19件、4校が6件、5校が4件、8校、12校、20校、25校、32校がそれぞれ1件、未回答が81件であった。この調査から、小1プロブレムに関しては、市区町村によっては20校以上発生している所もあったが、多くの市区町村においては1～2校程発生していることが判明した。

また、東京都教育委員会(2011)が公立小学校校長を対象にした調査<sup>8)</sup>において、「1年生で授業が成立しない状況があった」と回答した校長は、19.0%であり、小学校の5校に1校で「小1プロブレム」が発生していることが判明した。そして、そのような状況が発生した学級数は、3096学級中316学級であり、10.2%の割合であった。

従って、小学校において「小1プロブレム」の学校別発生割合は、約20%であり、学級別発生割合は約10%であることが判明した。

### (2)小1プロブレムの背景・要因

1,156の市町村教育委員会を対象に行った調査(複数回答)によると「小1プロブレム」発生の主要因として、「家庭のしつけ」868件、「子どもの自己抑制力の低下」779件、「児童の自己中心的傾向が強いこと」603件等を挙げている(東京学芸大学、2010)<sup>9)</sup>。

また、汐見稔幸(2013)は、その一因に「自律的な秩序感を育てないこと」を挙げ、「日本の幼稚園・保育所は世界的に見て規模が大きく、保育者が子どもをまとめる時に指示を出すことが多い。そのため、自己の内部から規律を求める自律的な秩序感が芽生えにくい」と述べている<sup>10)</sup>。

さらに、鈴木(2010)は、軽度発達障がいの子どもの複数いるケースや、幼稚園と小学校の違いに適応できないケース、基本的な学習態度の習得状況の低いケース等が関連していることを挙げている<sup>11)</sup>。

このように、小1プロブレムには、様々な要因が関連して発生していると考えられる。

## 3. 小1プロブレム解決や幼小接続に向けた取り組み

これまでの小1プロブレム解消や幼小接続に向けた小学校及び幼稚園・保育所における取り組みを概観す

る。

### (1)小学校と幼稚園・保育所における人的交流

小1プロブレム解消に向けた取り組みとして、第1に子どもと児童の交流が挙げられる。東京学芸大学(2010)によると、小学校の児童と交流を行った幼稚園・保育所は73.1%であり<sup>12)</sup>、また、文部科学省(2013)によると、小学校の児童と交流を行った幼稚園は75.8%であり7割を超える幼稚園・保育所で小学校と人的交流を行っていた<sup>13)</sup>。

第2に、保育者と教員の交流であり、保育者と教員の間で情報交換の機会や協議会等を設けていると回答した自治体は、東京学芸大学(2010)の調査では、86.9%<sup>14)</sup>、文部科学省(2013)では72.2%あった<sup>15)</sup>。

このように、現在では子どもと児童、保育者と教員の人的交流が7割を超えており、幼稚園・保育所と小学校における円滑な接続の改善が図られている。

### (2)小学校における教科内容の改善

先述した人的交流からさらに進展した取り組みとして、第1に、小学校1年生入学時期における指導方法に連続性を持たせることや、子どもたちが円滑に小学校に慣れることができるカリキュラムの編成の改善が挙げられる。

横浜市にある公立小学校では、「生活科」の授業において公園遊びを導入し、自然体験と調べ学習・創作活動を関連させ、学ぶ意欲や創意工夫、友達との関わり方等を育み、小1プロブレムが起こりにくい授業方法を提起している(鈴木邦明、2010)<sup>16)</sup>。また、上越教育大学附属小学校(2012)では、体験的な活動を充実させ、学校生活にスムーズに慣れるように1年次に「総合単元活動」の授業を設けており、児童の意欲を育み、人間関係を築き、落ち着いて学習に取り組めるようにしている<sup>17)</sup>。

しかし、文部科学省(2013)の調査では、幼小の接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている自治体は17.0%であった<sup>18)</sup>。

先進校や研究者によって一部の小学校で小1プロブレム解決に向けて、児童の多様な活動を取り入れ、幼稚園や保育園における保育を発展させた授業が展開されている現状ではあるが、今後、地域や各小学校に応じた教育課程の編成・実施が求められる。

### (3)幼稚園・保育所における保育内容の改善

子どもが小学校生活に円滑に適応することをねらいとしたカリキュラムの編成として、5歳児後期における保育内容の改善が挙げられる。

しかし、お茶の水女子大学(2005)によると、5歳児後期においてひらがなや数を意識した保育を行う、保育者や友達の話聞く、自分の考えを話す等の保育内

容の改善を実施している幼稚園・保育所は、23.4%であり、実践があまり進んでいない<sup>19)</sup>。

OECD(2015)は、21世紀において社会的成果を推進するためには、社会情動的スキルが特に重要な役割を果たすことを報告している<sup>20)</sup>。社会情動的スキルとは、目標達成のための忍耐力・自己抑制・目標への情熱等、他者との協働のための社交性・敬意・思いやり等、情動の制御のための自尊心・楽観性・自信等である。幼児期は、これらの基礎を築くことから、生涯の中で重要な時期であり、親子の関わりは認知的・社会情動的スキルに大きな影響を及ぼす(Kautzetal, 2014)<sup>21)</sup>。

従って、保育の中で保護者に子どもの育ちに関心を持ち、保育だけでなく家庭においても子どもの社会情動的スキルが促進できるようにプログラムを計画する。尚、保育内容5領域のうち、保育内容「環境」に焦点を絞り実施する。

#### 4. 研究方法

##### (1)調査対象

2015年11月から公募を行い、2016年1月に調査対象者を決定した。O県内の幼稚園及び保育所に通う5歳児とその保護者14組である。5歳児は、男児7名、女児7名である。

##### (2)調査時期

表1に示すように、2016年3月9日及び3月25日の2日間に、保育実践を行った。また、2016年1月に保護者を対象とした事前説明会及び予備調査を実施した。

表1. 調査日程

	15:30~16:15	16:25~17:10
3/9(水)		野菜を育てよう
3/25(金)	自然を探そう	自然を探そう

##### (3)保育実践内容

現在の幼稚園・保育所における保育内容「環境」に関しては、動植物の飼育栽培が中心であり、小学校における生活科との関連が深い。プログラムに子どもの発達段階に応じた自然体験を取り入れることによって、子どもの自然事物・事象に対する興味・関心が高まり、探究心や知的好奇心の芽生えが育まれることが予想される。

また、事前調査の結果、家庭における動物飼育の経験は14人中1人あり、植物栽培は、保護者や祖母が行っているが、子どもが主体となって植物栽培を行った経験は全員なかった。子どもが家庭で植物の栽培を行った経験がないことが判明したことから、子どもだけでも栽培が可能であること、3月の時期に栽培が可能であること、植物の成長に合わせて適切な世話が必要であること等の理由から、ラディッシュの栽培を実施

することに決定した。

本保育実践では、学内の自然探索や家庭における野菜栽培を体験し、探究心や知的好奇心の芽生えを培うことをねらいとする。また、保護者参加型の保育実践であることから、家庭における学びの継続性も期待できる。さらに、子どもでも安易に操作できる簡易顕微鏡や聴診器を準備し、自然の不思議さを体験できるように促すと共に、動植物の図鑑や絵本を用意し、主体的に動植物の名前を調べ、学ぶ気持ちを高めるように環境構成に配慮した。

#### 5. 結果

3月9日と3月25日における保育実践の結果をそれぞれ次に示す。

##### (1)野菜栽培に関するプログラム

本実践では、親子で植物に親しみ、植物の生長の不思議さや、生命の尊さ等を経験するために、図1に示すようにラディッシュの苗からではなく種付けから親子で一緒に栽培を実施した。さらに、間引きや土寄せなど、ラディッシュの生長に応じた世話の仕方を親子で学び、家庭において継続的にラディッシュの世話ができるようにした。また、物の大切さや物への愛着を育むために、廃材であるペットボトルを活用して、栽培用プランターを製作した。

保育実践中に、子どもは「土を入れるのがおもしろい」「芽が出るかな」など保護者や友達と話しながら、作業を行っていた。

表2は、第2回目の保育実践中に子どもが発したラディッシュに関わる主な発言である。



図1. ラディッシュの種付けを実施する親子

表2. ラディッシュに関する子どもの発言

名前	子どもの発言
A	「6つ芽が出てきた」
B	「毎日、水をあげていたら、芽が出てきた」
C	「芽が出てきて、嬉しかった」
D	「ハートの形の葉っぱだった」
E	「違う形の葉っぱが出てきた」
F	「葉がだんだんに大きくなってきた」



保護者から「自分でペットボトルの植木鉢を作ること、自分の植木鉢に愛着を持ち、大事そうに持って帰った」「初めて自分で種を植え、育てるという貴重な体験をして、嬉しそうだった」「毎日、水やりを行い、ラディッシュの生長を楽しんでいる」「ペットボトルに土を入れたことが新鮮だったようで、一番楽しかったと子どもが言っていた」等の記述があった。

図2と図3は、保育実践後に保護者がメールで送信した写真であり、「子どもがラディッシュを収穫できて嬉しかったので、メールした」「子どもにとっていい経験ができ、小学校への期待が増した」という旨の記述があった。



図2. 栽培中のラディッシュ



図3. 参加した子どもが家庭で収穫したラディッシュ

## (2) 自然に親しむプログラム

2回目のプログラムは、自然に親しみ、関心を高めることをねらいに、親子で大学内を散策し自然物を採集した。その際に、花や葉、虫、匂いのする物、手触りの特徴的な物など、視覚だけでなく嗅覚や触覚等の五感を働かせ、子どもが様々な自然物を探すきっかけとなるように、プリントを配布した。幼児期は、神経系の発達が著しく、味覚・嗅覚・触覚の基本感覚は長期記憶となるため、できるだけ五感を働かせ、自然に触れるように促した。

自然散策における子どもと保護者の感想は、表3に示すように「楽しかった」という感想が多く、子ども・保護者共に様々な自然に親しみ、楽しんでいることが

判明した。自然散策後に、図4や図5に示すように親子で自然物をルーペや顕微鏡で調べたり、絵本や図鑑で自然物の名前を調べたり、自然物を使って製作したりする活動を行った。その記録が図6である。また、採取した草花や葉っぱをラミネートして押し花を製作した。

表4は、これらの活動に関する子どもと保護者の代表的な感想である。表3の自然散策の感想と同様に、「楽しかった」「おもしろかった」という子どもの感想が多かったが、保護者の感想の中に、表4では「子どもが考えて…」という意見があった。

表3. 自然散策における子どもと保護者の感想

	感想
子ども	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色々な物を見つけるのが、楽しかった。</li> <li>・たくさんの花があってすごかった。</li> <li>・お花を探せて、嬉しかった。</li> <li>・石の下にダンゴムシがいたのがおもしろかった。</li> <li>・友達と一緒に探せて、楽しかった。</li> </ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの楽しそうな散策が見られてよかった。</li> <li>・普段足下に目を配って歩くことがないので、色々な発見ができて楽しかった。</li> <li>・花や葉など色々な種類の自然を見つけられていい機会になった。</li> <li>・友達の発見を教えてもらうなど学び合えているところが良かった。</li> <li>・よく見る花でも名前を知らずにいたので、色々な発見があり、子どもも楽しんでいた。</li> </ul>

表4. 自然物に観察・製作等における子どもと保護者の感想

	感想
子ども	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きれい、不思議だと思った。</li> <li>・色々と分かってよかった。</li> <li>・顕微鏡で見たり、図鑑を見たりしておもしろかった。</li> <li>・紙に花を貼ったり、押し花をしたりして楽しかった。</li> <li>・ミモザを顕微鏡でじっくりと見ておもしろかった。</li> <li>・顕微鏡で見ると葉っぱに丸いのがたくさんあった。</li> <li>・ルーペで大きく見えて、びっくりした。</li> <li>・ルーペで見ると黒い点が見つかった。</li> <li>・葉の縁がギザギザしていた。</li> <li>・押し花ができて、嬉しかった。</li> </ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家ではできない押し花ができてよかった。子どもが喜んでた。</li> <li>・押し花作りでは自分で配置を考えて楽しそうだった。</li> <li>・よく見るが名前の知らないものがたくさんあり、子どもと調べることができて勉強になった。</li> <li>・自分で採ってきた花の名前を図鑑で探すのは初めてだったが、意欲的に取り組んでいた。</li> <li>・同じグループの友達に花の名前の教え合いをしていた。</li> <li>・プリントのどこに何を貼ろうか色々と考えて作業していた。</li> </ul>



図4．簡易顕微鏡を用いて観察する親子



図5．絵本を活用し植物の名前を調べる親子



図6．子どもによる自然物の観察プリント

## 6. 考察

### (1) 知的好奇心・探究心の芽生え

ラディッシュに関する子どもとの会話では、表2に示すように、B「毎日、水をあげていたら、芽が出てきた」、D「ハートの形の葉っぱだった」、E「違う形の葉っぱが出てきた」、F「葉がだんだんに大きくなってきた」等の様々な発言があり、栽培を通して子どもの様々な発見・気付き等があったことが窺えた。

Bは、植物の生長における因果関係を考慮しており、科学的思考の芽生えが窺える。

D、E、Fに関しては、観察の過程で葉の大きさや形が異なっていくことに気付いており、小学校生活科や理科の学びに繋がることが期待できる。

図鑑や絵本を活用して自然物の名前を調べることは、

幼児には難しいかと予想し親子で調べるようにしていたが、今回の調査から幼児一人で名前を調べることも可能であることが判明した。図鑑や絵本の活用は、小学校における教科書の活用に繋がり、円滑な学びを促すと考える。

そして、ルーペを活用した観察は、表4に示すように子どもから「葉を虫眼鏡で見ると、黒い点が見つかった」「葉の縁がキザキザしていた」等の発言があり、道具を使うことによってより深い気付きがあることが窺えた。さらに、小型顕微鏡を活用すると「粒々が見えた」「緑の丸いものがたくさんあって、すごかった」等の感動を伴う発言が子どもだけでなく保護者にも多く見られ、自然の不思議さを体感する経験に繋がった。一般的な幼稚園・保育所では、ほとんどこれらを使用していないが、これらの使用は子どもの自然に関する関心や、自ら調べる意欲を高めることに繋がり、今後、幼稚園・保育所におけるルーペや簡易顕微鏡の普及が望まれる。

さらに、図6のプリントの作業やラミネータを活用した植物の押し花の製作に関しては、表4における保護者の感想から植物に関する愛着を高めると共に、製作・作業する過程において幼児が「考えて」取り組んでおり、このような過程において思考することが再確認できた。幼児が製作・作業を通して、自然物に対する愛着や関心を深めると共に、思考力の基盤を培うことが再確認できた。

### (2) 心情面の育ち

保護者の感想を見ると、「自分でペットボトルの植木鉢を作ることで、自分の植木鉢に愛着を持ち、大事そうに持って帰った」「初めて自分で種を植え、育てるという貴重な体験をして、嬉しそうだった」「毎日、水やりを行い、ラディッシュの生長を楽しんでいる」「ペットボトルに土を入れたことが新鮮で一番楽しかったと子どもが言っていた」等の記述があった。また、先述した保護者からのメールでは収穫の喜びの記述があった。

近年、幼稚園・保育所等における栽培は苗から行うことが多いが、種から芽が出る体験は、子どもの感動体験に繋がり、植物への関心を高めるだろう。感受性の豊かな幼児期に体験してほしい内容である。

このように自然に関する科学的な学びだけでなく、物への愛着、世話を行う責任感、植物の生長に対する喜び、土に触れる楽しさ、収穫の喜び等、様々な心情面の育ちが見られた。

## 7. 結論

幼稚園・保育所においては、野菜栽培をほとんどの園で行っているが、共同で栽培を行っているため、保育者が主となって世話に当たることが多い。そのため、

栽培に関心の薄い子どもは世話をほとんど行わない場合がある。また、保護者への事前アンケートによると、家庭においての植物栽培は、保護者や祖父母が行っている家庭はあったが、子どもが主体的に栽培している家庭はなく、今回の栽培が子どもにとって初めての栽培になった。栽培は、植物の生長による科学的な学びだけでなく、自然の不思議や美しさ等に気付くと共に、世話をを行うことによって、責任感や自然に対する愛着、生命の尊さ等を育むこと等、多面的な教育効果が期待できる。

従って、共同による栽培と個々による栽培を幼稚園・保育所において導入することで、さらに子どもの多面的な発達を促すことになるだろう。

そして、プリントに採集した植物を張ったり、スケッチをしたり、図鑑や絵本を用いて名前を調べたりする活動を行ったが、主体的に行う子どもの姿が見られた。保護者のアンケート調査において、「子どもだけでなく保護者自身も勉強になった」という意見が多く見られた。主体的に調べる経験は、知的好奇心や探究心を育み、一層自然に関心を持つことが期待できる。さらに、子どもだけでなく保護者もそのような経験を積むことで一過性の取り組みでなく、家庭においても継続的に取り組むことができ、学びに関する習慣化が期待される。円滑な幼小接続の一つの取り組みとして、参加日等において親子で楽しく学ぶこのような保育を導入することが考えられる。

## 8. 課題

今回の課題として、2回目の自然散策に関しては、数カ所場所を固定して観察を行う際に、子どもの関心が自然に集中して観察を行う配慮が必要であった。また、ビデオ観察による詳細な調査結果の分析とアンケート調査の分析が挙げられる。

さらに、円滑な幼小接続に向けての保育プログラムの開発として次の3点が挙げられる。第1に、保育内容「環境」における植物に関するプログラムだけでなく他の題材においても就学前に適したプログラムの開発である。第2に、保育内容「環境」以外の保育内容「健康」「人間関係」「言葉」「表現」におけるプログラムの開発である。第3に、5歳児後半のプログラムだけでなく、入園児から卒園まで長期的な視野に立った

保育プログラムの開発である。

## 引用文献

- 1) 新保真紀子 (2001) 『「小1 プレブレン」に挑戦する』, 明治図書
- 2) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (2010) 『幼児期の教育と小学校教育の接続について』, 文部科学省
- 3) ①文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領』  
②厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針』
- 4) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 生活編』 3頁
- 5) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』, 5-6頁
- 6) 前掲書5) 6-8頁
- 7) 東京学芸大学 (2010) 『小1 プロブレム研究推進プロジェクト報告書』
- 8) 東京都教育庁 (2011) 『小1問題・中一ギャップの実態調査について』
- 9) 東京学芸大学 (2010) 『小1 プロブレム研究推進プロジェクト報告書』
- 10) 汐見稔幸 (2013) 『本当は怖い小学一年生』, ポプラ社
- 11) 鈴木邦明 (2010) 「小1プロブレムが起これにくい授業方法の工夫」『国立青少年教育振興機構研究紀要』第10号 119-217頁, 国立青少年教育振興機構
- 12) 前掲書9) 22頁
- 13) 文部科学省 (2013) 『平成24年度幼児教育実態調査』15頁
- 14) 前掲書9) 22頁
- 15) 前掲書13) 15頁
- 16) 前掲書11)
- 17) 上越教育大学附属小学校 (2012) 『「入門期」の1年生での多様な体験を通し、自ら動き学ぶ意欲を育む』『VIEW21[小学校版]』Vol.4 10-13頁, ベネッセ総合教育研究所
- 18) 前掲書13) 14頁
- 19) お茶の水女子大学 (2005) 『幼児教育と小学校教育をつなぐ-幼小連携の現状と課題-』, 子ども発達教育研究センター
- 20) OECD(池迫浩子・宮本晃司/訳) (2015) 『家庭, 学校, 地域社会における社会情動的スキルの育成』, ベネッセ教育研究所
- 21) Kautz et al.(2014) “Fostering and measuring skills: Improving cognitive and non-cognitive skills to promote lifetime success”, *OECD Education Working Papers*, No 110, OECD Publishing, Paris.

## 謝辞

調査に際しまして、ご協力いただいた岡山県内の幼児及び保護者の皆様に心より感謝申し上げます。